

質的研究における「問い」について：「問いの現象学」を手がかりに

著者名(日)	田端 健人
雑誌名	宮城教育大学紀要
巻	46
ページ	185-192
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1138/00000200/



質的研究における「問い」について

——「問いの現象学」を手がかりに——

*田 端 健 人

Von der Frage der qualitativen Forschung
——Nach der Phänomenologie des Fragens——

TABATA Taketo

要 約

教育実践現場の観察に基づく質的研究においては、実践現場を観察するなかで「問い」が生起することが自覚されてきた。本稿の課題は、質的研究の「問い」の固有性を明確化することである。このために本稿は、「問いの現象学」を手がかりとする。本稿では、まず、「問い」のタイプを4つに区分する。「見せかけの問い」「情報収集のための問い」「既知の項から未知の項を割り出す問い」「哲学の問い」である。そして、質的研究では、第二と第三の問いも重要な役割を果たすが、研究の質を深める問いにとって示唆となるのは、第四の問いであることが指摘される。そこで次に、第四の哲学の問いと質的研究の問いとの異同を明確化し、質的研究の問いの固有性を浮かび上がらせたい。その結果明らかになるのは、質的研究の問いは、哲学の問いと同様に、問う者を傍観者にさせず、巻き込んでいくという根本特徴をもつことである。また、質的研究者の「観察の有限性」「感情の曖昧さ」「記憶の間違い」は、観念論的には否定的にしか評価されないが、現象学に基づくならば肯定的に評価される。最後に、こうした問いに対する応答についても考察する。

Key words： 問い、質的研究、現象学、教育現場、知覚、感情、記憶、本質、隠蔽

1. 質的研究における「問いの生起」

教育実践現場（以下「現場」と略記）の観察を研究の土台に据える、という意味での質的研究では、現場を観察するなかで「問い」が生起する、ということが自覚されてきた（cf., 鯨岡, pp.11-13; 本山, pp.86-89）。もちろん、現場に入ればすぐに問いが生起するわけではないため、問いの生起は、質的研究者としての一定の熟練と成長に属することも、自覚されてきた¹。さらに、質的研究では、現場の観察によって生起する問いが、当の質的研究を方向づけたり、牽引したり、規定することも自覚されている²。

しかし、研究において問いが生じること、そしてその問いが当の研究を規定することは、質的研究に限らず、量的研究でも、その他の研究でも、同様であろう。では、質的研究において問いの生起が殊更着目され、重要視されるのは、なぜなのだろうか。質的研究における問いやその生起には、他の諸研究とは異なる固有性があるのだろうか。

本稿では、質的研究、とりわけ筆者自身が携わっている解釈学的／現象学的アプローチによる質的研究において、現場を見ることで生じる問いの固有性を考察したい。そのために、本稿では、問いに関する現象学を導きとする。なぜなら、第一に、筆者による質的研

* 学校教育講座

究の手法が、解釈学や現象学を導きとしているからであり、第二に、他のアプローチによる質的研究も、根底において解釈学と現象学に依拠しているという指摘があるからであり³、第三に、現象学は、問うということをも、哲学上の研究テーマにしているからである⁴。

2. 「問い」に関する四つの区分

(1) 見せかけの問い

現場を観察していると、実際、多種多様な問いが湧いてくる。そうした問いのなかには、問いの形式をとってはいても、なんら答えを求めているわけではない問いがある。こうした問いを、「見せかけの問い」として、それ以外の問いから区別しておきたい。これは、メルロ＝ポンティが批判的に言及した問い、すなわち、「知っている者が知らない者へ向かってなす質問、言わば教師の質問」（メルロ＝ポンティ1991, p.265）である。例えば、「今何時ですか？」という教師の質問に対して、子どもが「11時です」と答え、「ありがとう」ではなく、「はいそうです」と教師が答える時の質問である。問う者は、既に一定の答えを手に入れており、その答えに満足している。あるいはまた、教育実習生の研究授業を、指導教員が見学する場合にしばしば見受けられるように、授業後の指導で、指導教員が、「あなたはどのようにあの場面で、あの発問をしたのですか？」と実習生に問いかけることがある。しかも、この問いによって、指導教員は、実習生に、発問した際の当人の思惑を尋ねているわけではなく、「あの発問をしたから、授業が混乱した」とか、「あの場面ではあの発問ではなく、これこれの発問をしなければならなかった」といった答えを既にもっており、この答えを実習生に教えるために、かの問いを投げかける場合である。

質的研究者であっても、現場を見ながら、知らず知

らずのうちに、こうした指導的立場から、見せかけの問いを問うことがある。現場を見ることによってはじめ得られる知見を探究しようとするならば、見せかけの問いは、質的研究の本質をなす問いではない。

(2) 情報収集のための質問

逆に、答えを知らない者が答えを知っている者に尋ねる質問もある。例えば、旅人が土地の人に道を尋ねるときの質問である。質的研究者も、こうした質問によって、現場についての多くの知識や情報を得ることができる。現場の教師や子どもしか知らないこと、わからないことは数多くある。また、現場を見ないと知ることができない慣習や出来事がある。それを聞き出したり、見出すのが、情報収集のための質問である。ボルノーのいう「インフォメーションを求める問い」（cf., ボルノー, pp.182-184）はこれにあたる。これは、現場の人間に尋ねれば答えが返ってくる質問であり、現場を見れば難なくわかってしまう質問である。

現場に入って尋ねないと答えられない質問を介して、現場についての知識や情報を得ることは、確かに、質的研究の一つの重要な仕事である。しかし、こうした質問によっては、現場についての知識や情報の量が増えるだけであり、質的研究の質を深めることにはつながらない。そのためには、情報収集の質問とは異なる質的な問いが必要になる。

(3) 既知の項から未知の項を割り出す問題

メルロ＝ポンティはまた、批判的な文脈で、次のような問いにも言及する。すなわち、「未知の項を既知の項との関連によって見だしてゆくような問題解決法」（メルロ＝ポンティ1989, p.293）である。この問いでは、答えられるべき未知の項は、差し当たり隠されている。見せかけの問いでは、問う者には未知の項がなかったのに対して、この問いでは、未知の項があり、問う者はまだ答えを知らない。しかし、あたかも方程

1 本山方子は、「現場に行けば、今まで気づかれなかった問題が見つかるというわけではない」と指摘し、「現場や学問の世界との絶え間ない対話を通して、やっと『問題』らしきことが現場で立ち上がってくる」とみなす（本山, p.84）。

2 鯨岡峻は、「現場を生きる中から問いを立ち上げてこそ研究が拡がり、また深まるという方向」（鯨岡, p.13）がある、と指摘している。

3 例えば、メリアムは、「現象学は、すべての質的調査法をささえる哲学的思想のひとつの学派である」（メリアム, p.21）と述べている。また、マクレオッドは、「現象学以外の何に依拠しているにせよ、あらゆる質的研究者たちは、研究のどこかでフッサールに端を発する手法を応用して」（マクレオッド, p.69）いると述べ、「どのような質的研究法においても、意味を構成する上で、現象学的とテキスト解釈学両方の方法が用いられて」（マクレオッド, p.83）いる、ともいう。

4 「問いの現象学」を主題にした論文としては、関根（2000）、井原（2003）、吉川（2006）、大森（2007）、北川（2008）などがある。

式を立てて未知の解を求める時のように、既知の項を操作することによって、未知の項が導き出されるような「問題」である。こうした問題を、私は、「私にとっては外的なさまざまな所与を考察することによって」（メルロ＝ポンティ1988, p.102）解いていく。「いかにして橋を架けるかを知ろうとする」場合も同様であり、「問題のデータを検討し、未知の部分を見いだそうとする」のである（メルロ＝ポンティ1988, p.102）。

こうした「問題」を質的研究の場面で具体化すれば、次のようになるであろう。例えば、幾つかの通常学級を観察していて、軽度発達障害と診断された子どもやその疑いのある子どもが予想以上に多い事実と直面し、「現在の日本の小・中学校の通常学級には、軽度発達障害やその疑いのある子どもは、どのくらいの割合にいるのだろうか？」といった問いが、思い浮かぶときである。こうした問いに対しては、既知の質問紙調査法等を活用することで、統計的妥当性をもった答えを得ることができる。あるいは、或る小学生A君を見ていると、「A君はアスペルガー症候群ではないだろうか？」という問いが湧き起る場合も、専門医が所定の手続きに従ってA君の行動や育成史等を調べることで、答えとしての診断を得ることができる。

しかし、質的研究は、一層解答困難な問いに関わっているように思われる。そして、一層解答困難な問いこそが、質的研究の質を左右するように思われる。

(4) 哲学の問い

メルロ＝ポンティは、これらの問いとは異なる「哲学の問い」を提示する。「哲学においてわれわれは一種のきわめて特異な問題に関わる」、すなわち哲学では、「問題を提起する者自身がその中に巻き込まれてしまうような問題」に関わる（メルロ＝ポンティ1988, p.102）。哲学の問いを問う者は、「問題の傍観者ではなく、事件に捉えられて」（メルロ＝ポンティ1988, p.102）しまっている。問いを呼び起こす謎も、その謎を解くための手がかりも、問う者にとって、外的な所与やデータではなく、問う者は、謎や手がかりに対して無関係な傍観者に留まることはできない。むしろ、問う者は、謎や手がかりに巻き込まれ、捉えら

れてしまっている。

こうした哲学の問いは、質的研究に固有な問いを考える上で、示唆的である。というのも、量的研究が研究対象に対して距離を取り、それからの影響を最小限に留め、研究対象を外的な所与やデータにするのとは異なり、質的研究は、研究のフィールドにどっぷり浸かり、研究すべき相手や出来事に作用を及ぼしたり、それらから作用を被る点に、基本的特徴があるからである⁵。質的研究者は、事件の傍観者ではなく、いかなれば、研究すべき相手や出来事に巻き込まれ、捉えられてしまっている。

3. 哲学の問いと質的研究の問い

(1) 哲学の問いにおける巻き込み——知覚／私と他者との関係／歴史——

では、問う者が巻き込まれ捉えられる問題とか事件とかは、哲学の場合、どのようなものだろうか。メルロ＝ポンティによれば、哲学の問いが上記のように理解される時、それに伴って、次の3つが哲学のテーマとして浮上する。「知覚」「私と他者との関係」「歴史」がそれである。

知覚においては、不思議な認識が生じている、とメルロ＝ポンティはみなす。私が「反省する時、注意する時」、私の「まなざし」は、私の内面も含めた「事物に対する私の知覚へと向けられ」るが、「この知覚はすでにそこにある」、すなわち、注意が向けられた時には「常にすでになされてしまったものとして姿をみせる」（メルロ＝ポンティ1988, pp.102-103）。それゆえ、知覚を問う私は、私の知覚で「起こっていることを理解しようとしはじめる時に、すでにその作用の中に捉えられている」（メルロ＝ポンティ1988, p.103）、とメルロ＝ポンティはいう。つまり、知覚するとはどのようなことかという哲学の問いにおいては、私は、私が注意を向ける以前に私が既に成し遂げてしまっている知覚作用を問題としており、私は、私が知らないうちに遂行している私のこの作用へと送り返される。この知覚作用が、問われている問題事件であるため、この問いにおいて、私は、問われている問題事件へと

5 これは、質的研究において、「観察者と観察対象の相互作用や社会的相互行為」（やまだ, p.11）として概念化され、認識されてきたことである。

巻き込まれている、というわけである。

次に、私と他者との関係について。メルロ＝ポンティによれば、デカルトやカントの場合、「哲学者としての自分が行う推論は、他のすべての人々にも […] 同じように再遂行されうる」（メルロ＝ポンティ1988, p.103）ことが自明とされてきた。というのも、彼らが問題とし考えているのは、「万人の理性」であり、「自分の理性」についてのみではないからである（メルロ＝ポンティ1988, pp.103-104）。ところが、ヘーゲル以降、自分と他者との関係は、「はるかに複雑な問題」であると認識されるようになり、「私と他者との関係は、私について真実であることは彼にとっても真実であるということ、直接的に断言したり前提したりできるようなものではない」ことが自覚されるようになった（メルロ＝ポンティ1988, p.104）。「私は自己を内部から認識するのに対し、それらの人々のことは外部からしか認識していない」（メルロ＝ポンティ1988, p.104）。

この問題が、それを問う私をどのような意味で捉え巻き込んでいるかを、メルロ＝ポンティは明言していない。「『私』と他者との関係」の問題ということで、既に「私」が問題になっているという意味で、問う私が巻き込まれているとも解釈できる。さらには、私が知覚し私なりに理解している他者に関して、私の知覚や理解はどこまで正しいのか、どのようにして可能になっているのか、という仕方で私自身の他者知覚が問題になる、このような意味で、問う私が巻き込まれているとも解釈できる。

歴史というテーマは、他者のテーマと同じである、とメルロ＝ポンティはいう。歴史というテーマでは、「人間がひとりぼっちでいるのではなく、他の人々と向かい合っている時に、彼らとの並外れて複雑なその関係の中で与えられ」という「人間の条件」が、問題になる（メルロ＝ポンティ1988, p.104）。私と他の人々との複雑な関係に、歴史が入り込んでいる、ということであろう。「他の人々との複雑な関係によって、われわれはもはやただ並列されただけの個人と関わるのではなく、一種の人間の織地、時に集団と呼ばれる人間的織地と関わるようになる」（メルロ＝ポンティ1988, p.104）。このテーマに関しても、メルロ＝ポンティは、どのような意味での巻き込みが生じているかを語っていない。解釈すれば、哲学が歴史を問う時、

問う者は、私と私が向き合っている他の人々との複雑な関係を織り込んでいる歴史的集団の人間の織地を問題としていることになる。私と周りの人々を織り込んでいる織地が問題になるため、歴史への問いにおいては、私は、この問いの外に留まることはできず、この問いに巻き込まれているということであろう。

(2) 哲学の問いと質的研究の問い

以上は、メルロ＝ポンティのいう哲学の問いにおける私の巻き込みである。こうした巻き込みとの関連で、質的研究の問いについて考えてみたい。

現場を実際に「見る」という質的研究の基本特徴からすれば、知覚の問題は、避けて通ることができない。知覚といっても、チョークや黒板といった単純な事物の知覚というよりも、むしろ、子どもとか教師の表情や行動といった他者知覚が主な問題となる。事物の知覚ももちろん問題となるが、子どもが散らかした文具やノートとか、子どもが摘んできた草花といった、他者の行動を伴うような事物知覚が主に問題となる。それゆえ、質的研究における知覚の問題は、私と他者との関係の問題や歴史の問題と絡み合っている。このように考えるならば、質的研究の問いでも、哲学的問いと同じ巻き込みが生じると考えられる。もう少し具体化してみよう。

例えば、アスペルガー症候群の疑いのあるA君を見ていると、「どうしてA君は、感情を爆発させて教室を飛び出すのだろうか？」という問いが湧き起る。この問いに対して、診断書によって、「A君はアスペルガー症候群だから」という解答で納得するならば、この問いは、既知の項から未知の項を割り出す問いでしかなかったことになる。現場から強く作用を被っている場合には、仮にA君にこうした診断が下されていたとしても、A君についてのこの問いは鳴りやむわけではない。この問いは、こうした解答でもって解決できない余剰を含んでいる。

また、「どうすればA君は、周りの子どもと良好な関係を築いたり、授業と一緒に参加できるようになるのだろうか？」といった問いも、同様である。アスペルガー症候群の子どもに対する有効な対処法が専門家によって開発されているが、現場から強く作用を被っている場合には、こうした対処法を用いたところで、この問いは鳴りやむわけではない。

これらの問いは、現場を目の当たりにすることによって生起する場合、哲学が問う「神秘」に似ており、「この神秘を何らかの〈解決〉によって霧散させることなぞ、問題となりえぬ」(メルロ＝ポンティ1989, p.24) ような性格をもっている。これらの問いは、速やかな解決を求めているだけでなく、一層解決困難な問いへと問う者を引き込んでいく。前者の問いでいえば、「A君が感情を爆発させ教室を飛び出すのは、A君だけの問題だろうか?」「周りの子どもや担任教師が、A君をそのようにさせてしまっているところはないだろうか?」あるいは「かつてのクラスメイトやこれまでの担任教師の影響はないだろうか?」といった問いが生じてくる。また、「A君は、感情を爆発させない時もあるのに、どうしてこの場面では感情を爆発させるのだろうか?」「感情を爆発させない時、A君はどのような状態でのいるのだろうか?ただ感情を爆発させていないだけで、不満を募らせ、孤独な思いをしているのではないだろうか?」とか、「A君は家庭ではどうだろうか?」といった問いも湧き起る。つまり、A君だけでなく、A君と関わる周りの子どもたちや教師や家庭、またそうした全体の歴史、さらに、感情を爆発させて教室を飛び出した場面だけでなく、そうでないときのA君やその時の周りの子どもや教師の行動といった全てが、問題となる。つまり、人間関係を含めたA君の全てが問題となる。同時に、A君の全てを、私がどれだけ知覚し理解できているか、私の知覚と理解が問題となってくる。「A君は、どうして感情を爆発させて教室を飛び出すのか?」という問いは、このようにして、「私はA君の全てをどれだけ知覚し理解できているのか?」という問いにつながっていく。A君を見ることで生起する問いでは、こうした仕方、私自身が傍観者であることはできず、私を捉え巻き込んでいくことになる。

また、これらの問いのなかには、先に考察した問いの区分でいう情報収集のための問いや、既知の項から未知の項を割り出す問題も含まれているため、これらに相応しい仕方、観察や聞き取りや調査等の作業を、可能な限り継続していくことになる。

(3) 知覚と理解の有限性

こうした作業と共に、質的研究の質に関して重要となるのは、次のことである。すなわち、「私はA君の全てをどれだけ知覚し理解できているか?」が問題になる時、当然、「私はA君の全てを知覚・理解しているわけではない」ことを認めざるを得なくなる、ということである。どれほど観察を繰り返そうとも、私は、事実上も原理上も、A君の全てを知覚・理解することはできない。私は、事実的かつ原理的に免れようのない私の知覚と理解の不完全さに直面する。

ここで現象学が、新たな地平を開いてくれる。「古典的タイプの哲学者が〔知覚や〕認識現象の不完全性を強調するのに対し、現象学はこの不完全性のうちに含まれている否定に満足せず、むしろこの否定を、現象を構成するものとして措定する」(レヴィナス, p.184)⁶、とレヴィナスはいう。私の知覚・理解の不完全性は、現象学によって、人間にとっての現象を構成する本質契機として捉え直される。「有限者の次元で顕現する現象の本質は、現象の本質自体なのである」(レヴィナス, p.185)。いかなる隠れもない、完全で絶対的な顕現という理想は、「経験の上空を飛んで経験を判断することを可能にする理性」、という「カント以前のあらゆる観念論」が想定した理想にすぎない(レヴィナス, p.186)。これに対して、「フッサールにとって理性とは、一挙に所与の上に位置する手段を意味するのではなく、〈経験〉と等価であり、こう言ってよければ、対象が『体的に』[leibhaft]、『骨肉を具えて』[en chair et en os]、現在するという、経験の特権的瞬間と等価なのである」(レヴィナス, p.186)⁷。観念論からすれば、私の知覚は不完全であるが、現象学からすれば、こうした知覚において顕現する現象から、その現象そのものの本質を捉えることができることになる。さらに言えば、A君についての私の知覚は、不完全で部分的ではあるものの、私の知覚に顕現するA君の姿は、A君の本質的な何かを示しているかもしれないのである。

観念論やその影響を受けた常識にとっては否定的なものが、現象学に基づくならば、肯定的なものに転換されうる。例えば、「感情が心理的生の一つの不明瞭

6 [] 内は引用者による補足。

7 [] 内は邦訳書。

な事実だとしても、現象学的記述はこの不明瞭性を、感情の一つの積極的特徴とみなすであろう」(レヴィナス, p.184)。例えば、「A君はどうしてこういうことをするのだろうか?」という問いに含まれる私の困惑した「感情」も、A君を知覚・理解するうえで積極的な意味をもつようになる。そのため、質的研究の問いにおいては、質的研究者自身の感情や現場の人々の感情も、研究の俎上に乗るようになる。

さらに、現場でA君を観察した後、それを思い出すということについても、こうした記憶は曖昧であったり間違ったり変容するため、研究においてはその曖昧さや間違いや変容が是正されるべきである、という観念論的常識的な見方とは異なる知見が、現象学によって得られる。「思い出がつねに、それが立ち戻ってくる現在によって変様されるとしても、現象学は誤った想起については語らず、この変質を想起の本質性格とする」(レヴィナス, pp.184-185)。「それ自体において正確な、そして変様を生じさせる現在から独立した思い出というものは——一つの抽象物であり、[...] 想起の合法的概念は、体験された[生きられた]記憶の具体的状況から取り入れられるのでなければならない」(レヴィナス, p.185)⁸。そうすると、過去の「正確な」記録という観念は、「一つの抽象物」でしかないことになる。現象学に基づく時には、こうした正確さを求める必要はなくなり、むしろ、生きられた経験において変容される記憶を記録することが肯定される。A君についての私の記憶は、かつて知覚した時から変容しているかもしれないが、これが想起の本質性格であり、こうした変容を認めて、A君のさらなる観察と理解に活かしていくということになる。

もちろん、これは、私の記憶が間違っているともよいと開き直すことではない。記憶が変容することを記憶の本質と認めることは、記憶の忘却や偽装や変装が避けられないことを認めることであり、自分の記憶の変容についても問題にすることである。自分の記憶の変容の仕方が、A君や現場を深く豊かに知覚・理解することに寄与するものなのか、それともかえってそれを

妨げるものなのかといった問題をも、引き受けることである。

現象学的な質的研究の問いは、このようにして、私の知覚や理解を巻き込み、私の感情や私の記憶をも捉え巻き込んでいく。質的研究における、子どもや教師や出来事への問いは、彼らやそれらの全体への問いへと根深く関連し、ひいては、知覚し、感じ、記憶する質的研究者自身をも、つまり質的研究者の知覚や感情や記憶をも問題にするような問いである。したがって、質的研究の問いは、哲学の問いと同じく、「自分があらゆる知識にさし向ける問いを、自分自身にもさし向けねばならぬ」(メルロ＝ポンティ1989, p.25)のような問いである。

4. 質的研究における問いの未完結性と応答

(1) 哲学の問いの未完結性

以上のように、質的研究の質を深める問い、つまり質的研究が本領とする問いは、哲学の問いとして理解可能である。この問いは、問う者を傍観者としめない問いであり、問う者を巻き込む問いであり、解決を求めるともむしろ、一層深い一連の問いへと連関していく問いである。質的研究では、この問いが主導的な問いとなって、情報収集の問いや、既知の項から未知の項を割り出す問いも活用される。質的研究の問いの固有性は、このように考えられる。

そうすると、この問いはいつになったら終わるのか、ということが問題になる。解決よりもさらなる問いへと連動していくこの問いは、果てしなく問い続けるしかないように思われるし、事実そうであろう。そうすると、この問いには、解答が全くないのだろうか。

質的研究の一つグラウンデッド・セオリーならば、「理論的飽和」(cf., グレーザー・ストラウス, pp.85-87)が調査の終了時点になる⁹。しかし、哲学の問いを含む現象学的な質的研究に、「理論的飽和」など存在しない。解決を求めてはいない「神秘」に取り組む哲学の問いにとっては、換言すれば、「世界の神秘と

8 [...]は引用者による省略であり、[生きられた]は邦訳書のままである。

9 グラウンデッド・セオリー内部でも、理論的飽和に関しては異論がある。木下康仁は、「理論的飽和化は理解しにくさとともに実践上でも難しい面がある」(木下, p.266)と述べ、「カテゴリーが網羅的に形成され、カテゴリー間の関係が一定の論理的必然性により統合化されたとしても、その前提である限定範囲は調査者の判断によるものであり、したがって相対的であり、調整可能である」と批判する(木下, pp.266-267)。

理性の神秘とを開示することを任務としている」現象学にとっては、「未完結性と、いつも事をはじめからやり直していく歩みと」が「不可避的」であり、「自分が一体どこに行くかを決して知らない」とされる（メルロ＝ポンティ1989, p.25）。それゆえ、こうした哲学は、「一つの対話ないしは無限の省察」（メルロ＝ポンティ1989, p.25）にならざるを得ない。そうすると、現象学的な質的研究の問いも、同様に、決して終結することのない、無限の省察の歩みとなるのだろうか。そして、同じ問いであっても、いつもはじめてから問い直すことが不可避であるのだろうか。

仮にそうだとしても、現象学者が無限の省察の歩みのどこかで、それまでの省察の歩みを「著作」として結実するように、現象学的な質的研究の、ほとんど無限に連鎖する問いにも、作業に一つの区切りをつける時が、原理的に到来するのではないだろうか。そうだとするならば、それはいつだろうか。

(2) 問いへの応答としてのA君の行動の根拠

もう一度、具体的な問いに戻ってみよう。

「A君は、どうして感情を爆発させて教室を飛び出すのだろうか？」という問いは、既にみたように多種多様な問いへと連鎖し、A君の全てを知覚・理解することを求める。もちろん、私はA君の全てを知覚・理解することはできない。この有限性は現象学によって肯定されるとはいえ、質的研究では、A君についての私の有限な知覚・理解を可能な限り広げていくことがめざされる。そうすると、どこでこの作業に一応の終止符が打たれるのだろうか。余りにも自明な答えであるが、それは、この問いにある程度納得のいく答えが得られた時である。では、ある程度納得のいく答えとは、どのような答えだろうか。

答えになるのは、それまでの観察によって得られた知識や情報を既知の項として用い、方程式を解くようにして得られる解でないことは、既に明らかであろう。また、答えになるのは、観察を継続することで蓄積された事実や情報に、いわば同列で加わる新たな事実や情報ではない。観察された新たな事実によって、問いに対する決定的な答えが得られたと実感できる場合もあるが、その場合、その新たな事実は、それまで観察されてきた諸事実によっては示されなかった何かを示している、特別な事実である。

「A君は、どうして感情を爆発させて教室を飛び出すのだろうか？」この問いが問い求めているのは、A君の行動の「根拠（Grund）」である。この問いは、私には理解困難なA君の行動の根拠を問うており、その根拠がわかった時、この問いは一応完結する。一応というのは、この根拠は、因果律という原因のように、問う者である私から、それゆえ私を織り込んでいる歴史から独立して恒常的に存立するものではないからである。この場合の根拠は、因果律という原因ではなく、A君の行動の根源であり、いってみればA君の行動原理である。一層正確に言えば、A君がそのように行動せざるを得なくなっている由来であり、A君にそうした行動を惹起している一種の可能性の条件である。

しかも、この問いが一連の問いと連関していく問いである以上、この問いに対する答えとなるA君の行動の根拠は、「感情を爆発させて教室を飛び出す」という行動の根拠であると同時に、さらに、一連の問いに導かれて観察されたA君の様々な行動の根拠にもなるような同一の根拠である。つまり、観察されたA君の全ての行動を整合的に理解することを可能にする根拠である。観察された全ての「行動」というだけでは不十分である。「行動」だけでなく、観察されたり聞き取ることができた、その都度のA君の表情、言葉、他の諸表現も含めたA君の全ての根拠である。

A君の全てに常に立ち会い、A君のこうした全てを規定し可能にしている根拠、こうした根拠を、A君の表象や認知能力とみなすのか、A君の心理とみなすのか、A君を取り囲む集団構造とみなすのか、それとも、A君の意識、A君の存在ないしは実存とみなすのかは、研究者が意識的あるいは暗黙のうちに前提としている哲学的立場によって異なるであろう。こうした哲学的立場のいずれが、A君の全ての根拠を理解する上で一層適切なのかという問題は、さらに深い論点である。現象学では、こうした論点についても、論究可能である。

質的研究では、A君について観察と聞き取りを続けていくうちに、あるいは、A君の成長変化を目の当たりにすることで、それまで理解困難だったA君の表情や振舞いの根拠が、一挙に閃くように理解できる瞬間がある、というのが筆者の実感である。この理解は、もちろん間違っている可能性もあるし、後に覆されることもある。しかし、当初の問いに一応の終止符を打

つような理解が閃く時がある。実感をもって理解されるA君の行動等の根拠には、解釈学ならば「生」という根本概念によって、またフッサール現象学ならば「意識」や「超越論的相互主観性」という根本概念によって、さらにまたハイデガー哲学ならば「存在」や「実存」といった根本概念によって、接近可能になるであろう。根拠を「存在」とみなして要約すれば、観察や聞き取りを継続していくなかで蓄積される膨大な事実を通して、A君というかけがえのない一個の存在が、それまでよりも一層深く一層明確に理解できた時こそが、質的研究の一連の問いに対して、一応の応答が得られる時である。

【付記1】：本研究は、科学研究費補助金事業の助成を受けた基盤研究(C)【課題番号：23531038】の研究方法論に関する成果の一部である。

【付記2】：本稿の一部を、筆者は加筆修正して、日本教育方法学会第47回大会(2011年10月2日於秋田大学)にて口頭発表した。

引用文献

(※括弧内の年号は、初版の年号である。ただし、レヴィナスの文献に限り、括弧内の年号は原論文の発表年にした。)

- ボルノー, O. F. 2001 (1978) 『問いへの教育 増補版』(森田孝・大塚恵一訳編) 川島書店
- グレーザー, B. G.・ストラウス, A. L. 1996 『データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか——』(後藤隆・大出春江・水野節夫訳) 新曜社1996
- 井原健一郎 2003 「問いの問い——メルロ＝ポンティの『哲学的問いかけ』について——」メルロ＝ポンティ・サークル『メルロ＝ポンティ研究』第7・8合併号
- 木下康仁 2008 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ——質的実証研究の再生——』弘文堂
- 北川東子 2008 「ハイデガーの『問うこと』——『問いの奇跡』とは?——」『理想』No.680理想社
- 鯨岡峻 2007 (2005) 『エピソード記述入門——実践と質的研究のために——』東京大学出版会
- マクレオッド, J. 2009 (2007) 『臨床実践のための質的研究法入門』(下山晴彦監修/谷口明子・原田杏子訳) 金剛出版
- メルロ＝ポンティ, M. 1988 「実存の哲学」『知覚の本性——

- 初期論文集——』(加賀野井秀一訳) 法政大学出版局
- メルロ＝ポンティ, M. 1989 (1967) 『知覚の現象学 1』(竹内芳郎・小木貞孝訳) みすず書房
- メルロ＝ポンティ, M. 1991 (1966) 『眼と精神』(滝浦静雄・木田元訳) みすず書房
- メリアム, S. B. 2006 (2004) 『質的調査法入門——教育における調査法とケース・スタディ——』(堀薫夫・久保真人・成島美弥訳) ミネルヴァ書房
- 本山方子 2007 (2004) 「現場から問題を生成する——〈出来事〉との遭遇から始まる自己・現場・学問との対話——」『質的心理学——創造的に活用するコツ——』(無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ編) 新曜社
- レヴィナス, E. 1996 (1959) 「現象学的『技術』についての考察」『実存の発見——フッサールとハイデガーと共に——』(佐藤真理人・小川昌宏・三谷嗣・河合孝昭訳) 法政大学出版局
- 大森史博 2007 「問いかけ——メルロ＝ポンティ後期存在論の射程——」日本現象学会編『現象学年報 23』
- 関根小織 2000 「ジャンヌ・ドゥロムの問いの現象学」『フランス・思想研究』第5号
- やまだようこ 2007 (2004) 「質的研究の核心とは——質的研究は人間観やもの見方と切り離せない——」『質的心理学——創造的に活用するコツ——』(無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ編) 新曜社
- 吉川孝 2006 「問いの現象学——フッサール、ダウベルト、ライナッハをめぐって——」日本現象学会編『現象学年報 22』

(平成23年9月30日受理)